



葛川明王院 太鼓まわし 撮影：青柳 滋



比叡山 千日回峰行 玉体杉 撮影：加藤 正基



伊崎寺 禊ぎ 撮影：加藤 正基

昨年、「結(ユイ)」という滋賀県内の集落で大切に受け継がれてきた慣習や思想をテーマとし開催した展覧会を引き継ぎ、今年は、セリアンアーツアテンション VOL.8「MUSUBU SHIGA 空想MUSEUM 2016 -近江のかたちを明日につなぐ-」と題して開催いたします。

今回の展覧会は「みえない遺産」をテーマとし、滋賀県ブランディングディレクター服部滋樹氏監修のもと、成安造形大学の附属近江学研究所が積み重ねてきた研究成果や、地域連携推進センターの連携事業を中心として、滋賀県の隠れた潜在力を未来へ繋がるカタチとして発信します。

滋賀県には世界遺産である比叡山延暦寺があり、千日回峰行などの難行で知られますが、これらの行には「祈り」と共に湧水や滝、琵琶湖など必ず神聖なる「水」が重要な要素として登場します。これらのことは、人と山川草木が一体化するという思想を具現化しているようにも見えます。また、本学学生たちが「日本遺産滋賀・びわ湖」に選定された県内各所をリサーチし、学生たちの目で見えた「日本遺産滋賀・びわ湖」を、彼らなり手法で再編集し、それらを広く発信するためのポスター作品を展示する他、滋賀県立栗東高校美術科ビジュアルデザイン専攻の高校生がリサーチし、ポスターにした作品など展示いたします。

その他、大津市坂本の伝統的な石積みで知られる六穴衆積をモチーフとした写真作品や、「湖と、陸と、人々と。MUSUBU SHIGA」のリサーチの中で見つかった滋賀県の魅力ある商品の展示や販売など、人間と自然が一体となる瞬間に注目し、様々な滋賀の「みえない遺産」を新しい視点で提示する展覧会を開催いたします。

*セリアンアーツアテンションは、成安造形大学が運営する「キャンパスが美術館」のメイン企画として、全てのギャラリーや学内各所を舞台に開催する総合芸術祭です。vol.0から始まった本企画は、本展で9回目となります。

成安造形大学【キャンパスが美術館】

出品作家・展示協力他

アイズ株式会社、魚治・湖里庵、伊崎寺、加納俊輔、葛川民芸保存会、葛川明王院、カフェテリア「結」紀伊國屋、暮らすひと暮らすところ、graf、COMMUNE、THEATRE PRODUCTS、滋賀県立栗東高校美術科ビジュアルデザイン専攻、神保真珠商店、寿福 滋、翠繪 泰、成安造形大学地域連携推進センター、成安造形大学附属近江学研究所、立花常雄、辻明生、外山 央、中川木工芸比良工房、NOTA&design、西久松吉雄、日吉大社、有限会社成子紙工房、有限会社ヤマタツ陶業、養覚瓦店、栗東芸術文化会館さくら、和ろうそく大興 and more

什器制作| barge fine products
会場構成| 加藤正基

ち れ ん
地域連携推進センター

●成安造形大学 地域連携推進センター
「芸術による社会への貢献」という大学の基本理念を具現化するため、地域と学生、教員を結び、ポスターやチラシ、看板制作からまちづくりなどの地域活性化事業に至るまで、ものづくりをもとにした地域連携活動を行っています。滋賀県芸術劇場びわ湖ホールとのオペラ舞台装置制作連携事業など産官学連携事業に積極的に取り組み、似顔絵イベント等含めると連携事業は年間約70件に及びます。

8. カフェテリア「結」& ミュージアムショップ

「湖と、陸と、人々と。MUSUBU SHIGA」がこれまでのリサーチの中から見つかったさまざまな魅力ある滋賀の商品と、成安造形大学附属近江学研究所のこれまでの活動の中で関わりのある工芸品や食品、近江学研究所発行の「文化誌『近江学』」の販売など多くの商品を取り扱い販売いたします。

服部滋樹
(滋賀県ブランディングディレクター)

私達は現在を生きる行者のごとく、念じ、身体へと引き寄せ、時代の中の違った視点の持ち主として、見えなかったモノを明らかに映し出してみよう。現在を生きる表現者として。

様々な形で受け継いでいるはずなのだ。失われず、生き残った「唯一」の意味を知り、次へ次へと引き継ぐ為の準備としよう。私達は現在を生きる行者のごとく、念じ、身体へと引き寄せ、時代の中の違った視点の持ち主として、見えなかったモノを明らかに映し出してみよう。現在を生きる表現者として。

そして現在、私達は今を生き、目の前に存在する先人からのメッセージを様々な形で受け継いでいるはずなのだ。失われず、生き残った「唯一」の意味を知り、次へ次へと引き継ぐ為の準備としよう。私達は現在を生きる行者のごとく、念じ、身体へと引き寄せ、時代の中の違った視点の持ち主として、見えなかったモノを明らかに映し出してみよう。現在を生きる表現者として。

「山、岩、樹、水、湖」
「日本遺産滋賀・びわ湖」をベースとした今回のリサーチは、今まで知らなかった周辺状況を明らかにしてくれた。現在まで受け継がれてきた滋賀の遺産は、ここに選ばれるもともと以前から、近江の山や岩、そして水が人々を寄せ、そこへの生活と信仰を見事に根付かせたのだ。そして現在、私達は今を生き、目の前に存在する先人からのメッセージを様々な形で受け継いでいるはずなのだ。失われず、生き残った「唯一」の意味を知り、次へ次へと引き継ぐ為の準備としよう。私達は現在を生きる行者のごとく、念じ、身体へと引き寄せ、時代の中の違った視点の持ち主として、見えなかったモノを明らかに映し出してみよう。現在を生きる表現者として。

2016秋の芸術月間 セリアンアーツアテンション VOL.8

「MUSUBU SHIGA 空想 MUSEUM 2016 -近江のかたちを明日につなぐ-」

会期| 2016年10月22日(土) - 11月27日(日)

休館| 11月10日(木)、26日(土) 時間| 12:00 - 18:00 入場| 無料

会場| 成安造形大学【キャンパスが美術館】
主催| 成安造形大学【キャンパスが美術館】、滋賀県 展示監修| 服部滋樹(滋賀県ブランディングディレクター)
共催| 湖と、陸と、人々と。MUSUBU SHIGA (滋賀・びわ湖ブランドネットワーク)
助成| 平成28年度 滋賀県「美の滋賀」創造事業、地域の元氣創造・暮らしアート事業、平成28年度 文化庁 文化芸術による地域活性化・国際発信推進事業
後援| 滋賀県教育委員会、大津市、大津市教育委員会、日本遺産「水の文化」ツーリズム推進協議会、文化・経済フォーラム滋賀

●服部滋樹
(滋賀県ブランディングディレクター)
graf 代表、クリエイティブディレクター、デザイナー。
美大で彫刻を学んだ後、インテリアショップ、デザイン会社勤務を経て、1998年にインテリアショップで出会った友人たちと graf を立ち上げました。建築、インテリアなどに関わるデザインや、ブランディングディレクションなどを手掛け、近年では地域再生などの社会活動にもその能力を発揮しています。
www.graf-d3.com



展示内容

1. MUSUBU SHIGA shop

「湖と、陸と、人々と。MUSUBU SHIGA」がこれまでのリサーチの中で見つかったさまざまな魅力ある滋賀の商品を集めて展示いたします。

2. 鮎寿しの魅力

本学の美術領域教授で附属近江学研究所所長である日本画家西久松吉雄による絵画作品の展示。被写体は「日本遺産滋賀」に選定される食文化の中でもその中心とも言える鮎寿しです。海津の老舗、魚治・湖里庵のこだわりの盛り付けがなされた鮎寿しをモチーフとして描かれました。また、昨年度の淡水真珠の貝殻を活用するプロジェクトで生まれた食器や酒器、貝ボタンなども合わせて展示いたします。

3. 日本遺産滋賀・びわ湖 フィールドサーヴェイプロジェクト

本学では日本遺産「水の文化」ツーリズム推進協議会の委託を受け、本学学生が「日本遺産滋賀・びわ湖」に認定された地域・史跡・食などの全てを調査・体験し、イラストレーションで表現した作品をポスターに編集して展示します。また、ポスター作品に加え、その原画や調査ノートの展示を通し、フィールドサーヴェイの魅力もあわせて紹介します。

●湖と、陸と、人々と。MUSUBU SHIGA

滋賀県に培われてきた魅力をより県外へ、世界へと発信しブランド力を高めていく為に発足されたプロジェクト。本プロジェクトのブランディングディレクターとして、graf 代表の服部滋樹氏が就任。ソーシャルデザインの視点から、滋賀県の魅力ある「ヒト・コト・モノ」を発見し、むすびあわせながら滋賀県の「これか」とみなさんと考えます。
www.musubu-shiga.jp



湖と、陸と、人々と。
MUSUBU SHIGA

4. 穴太衆 石積み

大津市坂本の伝統的な石積みで知られる穴太衆積を撮影した立花常雄による写真作品。ゼラチンシルバープリントでプリントされた350作品以上が巨大な平面に並び立つ姿からは、銀塩印画紙に由来する光の堆積と「野面積み」より受け継がれた技巧の堆積との相関が平面の作品に力強さをもたらします。また1枚1枚の写真からなるタイポロジーにより新たに日本的な地域・地場にある美しさというものを感じることが出来ます。

6. 葛川明王院の太鼓まわし

鯖街道、葛川沿いの大津市坊村にある葛川明王院で行われる太鼓回しと呼ばれる行事は、比叡山延暦寺の修行僧(行者)の修行と地域の人々の祭礼が合わさって行われる大変珍しい行事です。千日回峰行を創始した相応和尚(そうおうかしょう)(831~918)がこの地に入って修行したことを再現するため、大きな太鼓が堂内で回されるという所作が行事の中心となっています。この展示では、デザイナー・アーティストとして活動する外山央が、その大きな太鼓の音を録音・編集し、太鼓回しという行事の真髄に迫ります。

●成安造形大学 附属近江学研究所

近江の文化・風土と、芸術の持つ創造精神を結びつけ、新たな可能性を探索する研究機関です。地域に根づく文化・風土の調査研究など、多岐にわたり活動しています。研究者、作家、職人、クリエイターの公開講座や展覧会、デザイン性を重視しながら近江文化を多角的に捉える「文化誌『近江学』」の発刊、近江学フォーラム運営など社会に近江の魅力を発信しています。
www.omigaku.org



近江学研究所

5. 伊崎寺の棹飛び

近江八幡市にある伊崎寺では、毎年8月1日、琵琶湖に突き出た長さ約13メートルの木製の棹の先端から修行僧(行者)が約7メートル下の琵琶湖面向かって飛び込むという伝統行事が行われます。この展示では、琵琶湖とそれを囲む山々が育んだ琵琶湖材と呼ばれる素材で制作した同じサイズの棹を展示し、修行僧の着水の瞬間を捉えた映像を紹介して、修行の意義を考えます。

7. 山上山下七里半、比叡山回峰行の道程

7年間で千日間山上山下を回峰するという、比叡山延暦寺の厳しい修行の中でも最も難行と言われる千日回峰行。回峰行者は、根本中堂、弁慶水、玉体杉、大蔵、石仏など約260ヶ所に及ぶ場所で祈りを捧げながら歩きます。その回峰行の道程を本学の芝生グラウンドに縮小制作します。観覧者はこの道程を実際に歩き、「何度も回峰する」という行為について考え、山と行者の関係を探ります。

【キャンパスが美術館】
SEIAN ART CENTER